

石狩湾新港の

—海から眺めた 流通拠点としての機能— DNA

石狩湾新港は、北海道・小樽市・石狩市からなる「石狩湾新港管理組合」によって管理運営されています。そこであるとき、こんなことを聞きました。

「石狩湾新港は、道央圏を支える日本海側の流通拠点です。その役割を担うことは、受け継がれてきた港のDNAなんです」

それが一体どういうことなのか、言葉の真意が実感できたのは、船からこの港を見つめたときでした。

* * *

小樽開発建設部が地元小学生を対象に、石狩湾新港の見学会を行っているという聞き、子どもたちと一緒に港業務艇「ひまわり」に乗船したのは6月のある朝のこと。パラパラと降っていた雨もやみ、船は白い波をたてて、東埠頭を出発しました。

この東埠頭では、野積みされた金属くずの山をよく目にします。札幌圏のリサイクル施設の広域的立地に対応した「リサイクルポート」としての役割がある東埠頭ならではの光景です。この金属くずこそ、港の後背地域で稼働する、リサイクルに携わる企業が日々分別している再生資源であり、東埠頭から中国や韓国などへ向けて輸出する商品です。

環境負荷の低減と循環型社会の構築に貢献しているこの東埠頭は、砂や砂利といった建設資材も取り扱いながら、一方では朝市などが開かれる漁港区もあり、私たちの生活に親しみやすい埠頭といえるのかもしれない。



東埠頭から海外へと輸出される金属くず



港湾業務艇「ひまわり」に乗って、石狩湾新港を見学する紅南小学校4年生の皆さん

東埠頭を出発した船は、やがて中央埠頭の前へとやって来ます。

中央埠頭は、北海道を代表するエネルギー供給基地で、石油、LNG(液化天然ガス)、LPG(液化石油ガス)を収めるタンク群が並び立つ風景はまさに壮観です。それらを見ていると、かつて太平洋側が災害などにより石油製品の供給をストップした際、ここが拠点となつて、しつかりと人々の生活を支えることができたというのもうなずけます。

その中央埠頭を海から眺めていると、ここがどのように機能しているのか、何となく見えてくるから不思議です。

この日は、LNGを運ぶ巨大なLNG船の姿はありませんでした。にもかかわらず、LNG船が港に着き、基地からアームが伸びてきて、LNGを荷揚げするというイメージが浮かんできます。さらに、その基地からタンクに蓄えたLNGを、気体に戻して都市ガスに変え、パイプラインで札幌圏へと供給する、あるいはLNGのまま内航船やタンクローリー車で道内各地へと運んでいく…そんな光景が見えてくるようです。同じことが石油製品タンクを眺めても想像でき、「札幌で消費される灯油の約3割はここから

供給している」と聞いたことを、思い出しました。

子どもたちを乗せた船は、次に中央水路へと向かいます。その水路を挟んだ東側に花畔埠頭が、西側に樽川埠頭がそれぞれあります。

花畔埠頭には、港湾サイロとしては道内最大級のセメントサイロがあるほか、ガントリークレーンがありました。子どもたちが船の上から一心に見上げた、紅白模様の、50mの高さを誇るそのガントリークレーンこそ、コンテナと呼ばれる鉄の箱を積み下ろす専用の機械です(本紙表紙)。

海上輸送に欠かせないコンテナは、そのサイズが国際基準規格で決まっているため、世界中のトレーラーに載せて運ぶことが可能です。花畔埠頭にはこのコンテナを置くスペースが約5haあり、赤、青、緑などのコンテナが整然と積み重ねられていました。その中に、よく見るとコンテナのようなものにつながれたテナナがあります。リーファークテナナです。



札幌ドーム(245m)をもしのぐ巨大タンカーで運ばれてくるLNG(液化天然ガス)。中央埠頭の石狩LNG基地では24時間体制で、LNGから都市ガスを製造しています